



河野治彦

活動:

ミュージシャン、 パーカショニスト、 「コーノ・イ・ロス・ チーコス・デ・ クーバ」ディレクター

河野治彦さんへのインタビュー

「コーノ・イ・ロス・チーコス・デ・クーバ」(Kono y los Chicos de Cuba、河野とキューバの青年たち)というグループを聞いたことはありますか。キューバ在住歴30年以上の日本人アーティスト、河野治彦さんが率いるバンドです。アベル・アコスタ元文化副大臣は、河野さんのグループの最初のアルバム『Universos Paralelos(並行する宇宙)』(2017)のレビューにおいて、日本とキューバの「両民族に共通点がある」として、河野さんの音楽作品は両者の「融合」の集約であると評しました。メディアにも何度も登場する河野さんの創作力と魅力は周知のとおりであり、その背後には秘めた熱い思い、そして河野さんを支える多くの方々の存在が垣間見えます。

トゥンバドーラのリズムに押されて

河野さんは東京生まれで、音楽の道に進んだのは東京の大学のクラブ活動で参加していたフルバンドでパーカッションをしていたことがきっかけでした。特に「トゥンバドーラ」(コンガ・ドラム)のシンプルなコンセプトときれいな音、エキゾチックな雰囲気に魅了され、「本物を知りたい」と益々興味を惹かれていきました。「当時学業のことなどに口を挟まず、好きにさせてくれた父が、実は私の将来を楽しみにしていたのだということは、後年に成って知りました」と振り返ります。河野さんのキューバとの出会いは、「東京キューバンボーイズオーケストラ」のメンバーである恩師から借りた数枚のLPレコードでした。「その中の1枚が、ロス・ヴァン・ヴァンのリーダーのフアン・フォルメルがベースを抱えているジャケットだったのですが、キューバのポール・マッカートニーみたいな人だと思いました」と微笑みました。



アルバム『Universos Paralelos』

また、ラテン音楽を演奏する日本のグループと関係を持ち、キューバの現代ダンスミュージックだけを演奏する自身のオーケストラ「プーチーランド」を始め、在京キューバ大使館の催しに、何度か演奏のために招待されました。「日本で十分に実績を積んだ後、キューバの偉大な師匠に本物のリズムを習いたい」という気持ちが徐々に強まりました。父親が既に逝去していた1987年、河野さんは母親に「1年間だけ」と約束してキューバに渡る決意をしました。

キューバに到着、苦労の日々と出会い

キューバに到着してから、芸術大学(ISA)でキューバの打楽器を学ぶことになりました。日本を飛び出したものの、最初の1年は河野さんにとって苦難の日々でした。音楽の勉強に対する熱意は確かなのに、

スペイン語が話せないという壁は大きく立ちはだかり、学業も日常生活も、全て辞書を片手に臨まなければならなかったのです。最終的には、ISAの打楽器コースだけでなく、並行して、芸術高等学校でキューバの民族舞踊を学び、後は「イグナシオ・セルバンテス」音楽プロフェッショナル専門学校で音楽の勉強を続けました。

当初予定していた1年どころか4年もキューバにいましたが、この間、働きなが ら支えてくれた母親のことは忘れることはありませんでした。この困難の日々 を河野さんよりも赤裸々に振り返るのはイボン・モレイラさんです。「私が彼 と知り会った時、彼は丁度日本に帰国しようとしていた時で、やせ細り、ほと んど何も食べず、勉強ばかりしていました。」ほどなくしてイボンさんは河野 さんと結婚し、妻として、そしてパートナーとしても彼を支えることになりま す。「イボンに出会って、私は救われたんです」と河野さんは、笑う彼女の顔 を見つめ言いました。今ではコーノ・イ・ロス・チーコス・デ・クーバのマネ ージャーでもあります。その後、2人で日本に帰国しましたが、すぐにキューバ に戻ることになりました。

キューバへの帰国と「コーノ・イ× ロス・チーコス・デ・クーバ」の誕生

1991年、キューバの著名なミュージシャンを多数日本に招待するメ ガプロジェクト「ノーチェ・トロピカール」の準備を始めるため企画 が日本で行われていました。その企画には多くのメディア等日本の企 業が携わり、また、著名な知識人であり、小説家・映画監督等で活躍 される村上龍氏も関わっていました。河野さんは、同企画のためにキ ューバを訪れた村上氏の通訳兼アシスタントに抜擢されました。その 後、村上氏の映画「KYOKO」を制作する上でのキューバコーディネ ーターとして働かないかとの村上氏からの提案を快く引き受けまし た。河野さんは、音楽だけでなく、デザイン、造形、ダンスなどの分 野で、キューバと日本のアーティストの交流を促す一方で、徐々に自 身の音楽活動も発展させました。 村上氏は河野さんについて「キュ ーバ音楽の、わたしの師匠(『Universos Paralelos』)」と表現する ほどで、人生においてお互いに大きな存在であったようです。



1993年、河野さんはバンド「ディアカラ」に打楽器奏者としてグループに加わり、キューバでのプロの演奏家としてのキ ャリアを築き始めます。この間、様々な音楽プロジェクト、コンサート、テレビ番組などに参加し、アーティスト生活25周 年記念のDVDも録画しました。また、トゥンバドール(コンガ奏者)のソリストとして、映画にも出演しました。

20年以上の演奏活動を通じ、つ いに2015年、「コーノ・イ・ ロス・チーコス・デ・クーバ」 という自分のグループを作りま した。「自分の作品を発表し、 自分のスタイルを確立し、そし てキューバの人々に日本の歌を 知ってもらいたかったから」と 結成の目的を語ります。長年キ ューバで暮らしキューバ音楽に 情熱を捧げてきた河野さんです が、日本の音楽と疎遠になるど



ころか、むしろ祖国日本と「二つ目の祖国」キューバのそれぞれの音楽の融 合を模索し続けています。河野さんは、「日本民謡とキューバに根付く主に アフリカ起源の宗教歌には似ている点があると感じています。



共に、職業音楽家がつくったも のではなく、素朴さの面で相通 じるものがある様に、私には感 じられます。ただ、単に類似点 があったとしても、実際にそれ ぞれが融合し私が納得する音楽 に昇華するまでにはかなりの時 間を要します。それぞれ異なる リズムを融合させることで、そ のままの状態ではキューバ人に とって文化的に奇妙に感じる音 色にも、親しみをもたらすこと ができると信じています。」と 語ります。グループには三味線 や三線、篠笛や尺八、琴といっ た日本の伝統楽器を猛練習の末 に使いこなす才能あるミュージ シャンを起用することができま した。「日本語をそのままスペ イン語にしても面白味がないと ボーカルには怒られてしまいま した。なので現在のボーカル担 当のミュージシャンは、日本語 でも楽曲を歌います」と苦笑し ます。難しい作曲活動などを語 る顔付に、柔和でありつつも厳 しく真剣に良いものを作るとい うプロ魂を感じさせます。



オリジナルグループ



現在のグループ

笑顔のトゥンバドール

グループの結成から7年経ち、次々とリリースされる作品は、徐々に好評を集めていきます。2021年の東京五輪閉幕式において流れた「ピチカート・ファイヴ」の楽曲「東京は夜の七時」をリメイクした「Tokio a las 7 de la Noche」のアナログ盤は、HMVや日本のディスクユニオンなどのワールドミュージック部門で、売上1位を獲得しました。

今後の目標や抱負について答える前に、トゥンバドーラの「本物のリズムを習いたい」と駆け出しの頃から自分を支えた両親への感謝の気持ちは尽きないと、振り返りました。そして、抱負については、キューバで馴染みの少ない日本の伝統音楽の和の旋律を生かしつつ、さらに「日本の伝統楽器の音色をキューバでトップに持っていくような、ヒット曲を作りたいですね」と語りました。

66

「日本の伝統楽器の音色をキューバで トップに持っていくような、 ヒット曲を作りたいですね」

故フアン・フォルメルさん(キューバのミュージシャン)が自身のオルケスタ(バンド)の3代目のコンガ奏者をステージで紹介する際に使ったフレーズがあります。河野さんはそれを借用し、「キューバの人たちに「笑顔のトゥンバドール」と覚えていてほしいですね」と笑顔を見せました。



在キューバ日本国大使館 広報文化班